

化の激しい現代において、成長の過程にある子どもたちにとって重要な意味をもちます。これらの作品の背景には、豊かな体験の積み重ねとともに、落ち着いて表現に取り組むことのできる環境や時間が、園や学校で大切にされてきたことがうかがえました。

一方で、描写が巧みであったり、構図や画面構成が整っていたりするなど、完成度の高い作品も見られ、子どもの表現と指導との関わり方について考えさせられる場面もありました。子どもたちの表現には、みずみずしい感性や大胆な色使い、少し不安定でやわらかな線、身体の動きがそのまま表れた跡など、その時期にしか現れない固有の魅力があります。そこには完成度や巧みさとは異なる価値があり、子ども一人一人の「いま・ここ」の思いの表れとして、大切に受けとめられるべきものです。そうした表現を尊重しながら、多様な材料に触れたり試したりできる環境や適切な支えがあれば、子どもたちは自らの力を少し超えることにも挑戦していくことができるでしょう。「今できること」と「まだ難しいこと」の間にあるこうした経験が、結果として表現の幅の広がりとして作品に表れてくるのではないかと感じました。

出品された一つ一つの作品は、子どもたちが日々の生活や活動の中で感じ、考え、試してきた過程の積み重ねそのものです。作品を通して、その子らしさや思い、そして成長の歩みが丁寧に伝えられていくことに、本展覧会の意義を改めて感じました。今後も、子どもたちの表現を支え、育む実践が各園・学校で重ねられていくことを願い、本講評の結びといたします。来年の開催も心より楽しみにしております。